

ビデオマンの挑戦 (8月号)

八王子映像ビデオマン : Isomitsu Nogami 2019.7.26

プロフェッショナル

今月はいよいよプロフェッショナルな領域に入ってきたことを自覚する。令和元年7月3日と8日撮影を無事終えることができた。私の分野は公益性のある団体との関わりが性に合う。15年間理容美容という生活に関わる団体(理美容センター)でみっちり公益という分野での仕事をした経験があるからだ。管轄は厚生省で後に労働省と合体して厚生労働省となった。はっきり言って縦割りの職場である。他の課の事には一切口を出してはいけないと先輩から言われ自分に与えられた仕事を100%成しえれば9時・5時の生活を行えた。お蔭さまで誰にも文句を言われずに定年まで勤め上げることが出来たし無事に息子の大学3年間とその後の教員資格を得る資金も(半分は自分でも考えて教育ローンを借りたようだ)。

地方公共団体も似たり寄ったりの公益性を担っている。サービス残業などは無いし、不当労働なども縁がなく個人を大切にされた職場である。最初の部所は「学績課」であった。通信教育生のレポートを添削する仕事であった。後に通信教育課と名前が変わったが通信教育ではこのレポート添削が大変な作業であった。全国から毎日レポートが布袋ぬのぶくろに入って届く。その採点をする、二人体制で一人が採点をし、片方がレポートを正しくされたかをチェックする。間違っていると付箋を貼られ突き返される。修正して終了となるのだがレポートは通信生にとっては大切な履修履歴となる。60点以下だと不合格となり再度レポートを送って60点を取るまで再レポートを送り続ける。これらの作業は非常に神経質な作業であった。というのは、その人の人生がかかっているようで・・・。正解用紙とレポートを交互に、にらめっこしての手作業での添削だった。後に機械化(スキャナー)されたが最初の頃は集中力のある人材でなければまたソロバンが出来ないとだめな仕事でもあった。(正誤を正しく早く認識できるスキル)

ビデオの編集

ビデオを撮って編集する作業も大体このレポート添削と同じである。撮った映像の出来・不出来は撮る側(いいづらいけど、被写体)が重要である。昔、写真に「修正」と言って目の辺りを(目尻をきりっと)させると、美人になると私の一人っきりの姉は言っていた(見合い写真)ビデオでも同じような修正は出来る。コントラストをもっと明るくするなんてことは簡単に出来るし拡大縮小も自由に出来る。しかし普通の人にインタビューした場合は編集に時間をかけてそれなりのレベルに引き立てるのが編集の重要な仕事だ。はっきり言って時間がかかるが完成品を手にする人の笑顔を思いながら作業をする。自分の作品ではお金を掛けられないので家内に登場を願い、モデルになってもらったりナレーターをやってもらったりしています。見てくれる人が手にして喜ぶ事を頭の片隅に入れながら・・・。

失敗できないのが仕事

ビデオって今では携帯でも美しく撮れる時代です。孫の姿を動画で送ってくれるので可愛くてたまりません。ビデオは確かに身近になってきました。しかし結婚式や講演などを携帯で撮るのは個人が楽しむレベルであればOKですが、それを記録として残すものには到底考えられません。お金を払いプロの人に撮ってもらおうそれはどうしてでしょうか? 普通の方はプロの方は失敗しないからだと思っているからです。プロだって失敗することはありますがそのミスは最小限に留められる知恵やリスクを分散する方法を心得ている。私が入っている「日本映像制作者協会」ビズネットでの例会はそれら失敗の例を「最初の重要課題」として聞かされるのです。年一度開催される研修旅行ではとんでもない失敗を堂々と発表されるのです。失敗は成功の元と言われますが、責任を果たすことが出来なくなる事を回避するのがプロです。誰も撮影日の前日には酒は飲まないようです。私も先日の撮影で同僚の掛け声「自分のカメラがスイッチ」が入っているかどうか(最低限の確認作業)お蔭で気分を落ち着けることが出来ました。最初は初心者マークです。正直言ってドキドキですが完成したビデオを見せてビックリさせる事が出来ればカメラマン冥利につきます。ビズネットの皆様へ感謝する気持ちでいっぱい最近では月一の例会が楽しみになっている。

To be continued 野上五十満